森北町遺跡発掘調査報告書

1987

神戸市教育委員会

序

神戸市東灘区の位置する六甲山南麓は瀬戸内海に面し、気候が温暖で、大都市神戸・大阪の中間にあり、交通の便にめぐまれて、大正時代から住宅地として開発された地域です。

そのため、当地域の埋蔵文化財は私たちの目にふれることなく、千数百年の間、地下に眠り続けて来ました。しかし、近年市街地の再開発が進行する中で、多くの埋蔵文化財調査が実施され、新しい遺跡の発見が相続いています。ここに報告する森北町遺跡もその一つです。

森北町遺跡の調査は、調査面積は狭少でありますが、弥生時代中期の方形周溝遺構とそれに伴う一括遺物が出土し、当地域の弥生文化を解明する上で重要な資料になるものと思われます。

本書の刊行が、地域の歴史を理解するうえで、お役にたてば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査に深い御理解と惜みない御協力をいただいた関係各位に厚く感謝いたします。

昭和62年3月31日

神戸市教育委員会

教育長　山　本　治　郎

例　　言

1．本書は、日本放送協会東灘世帯寮新築工事に伴って実施した「森北町遺跡」の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は、日本放送協会大阪放送局の委託を受け、神戸市教育委員会が実施した。

3．今回の発掘調査は、神戸市東灘区森北町4丁目18番31号において、昭和57年5月1日から昭和57年7月15日まで実施した。

4．発掘調査は、神戸市文化財専門委員の指導のもとに、以下の調査組織によって実施した。

調査関係者組織表

神戸市文化財専門委員（埋蔵文化財部会委員）

野地　脩左　　神戸大学名誉教授

小林　行雄　　京都大学名誉教授

檀上　重光　　神戸新聞社副主筆（現神戸市立博物館副館長）

神戸市教育委員会事務局

教育長　山本　治郎

社会教育部長　太田　修治

文化財課長　八尾　　明

埋蔵文化財係長　奥田　哲通

事務担当　学芸員　丸山　　潔

調査担当　学芸員　西岡　巧次

5．本書の作成にあたって、出土遺物の整理・復元作業は吉川京子、林美智子の各氏が行った。出土遺物の実測図のうち、石器類については学芸員西岡誠司が行い、土器類は西岡巧次が行った。遺構・遺物の写真撮影はすべて西岡巧次が行った。整図作業は、京都学園大学卒業生中井秀樹、神戸外国語大学学生西川史代、山本浩子の各氏と、西岡巧次が行った。

6．本書の執筆・編集は西岡巧次が行った。

目　　次

頁

I．はじめに……1

II．周辺の弥生遺跡……3

A．高地性集落遺跡……3

B．斜面に立地する遺跡……3

C．沖積地の遺跡……4

D．祭祀関係遺跡……4

III．調査概要……6

1．検出遺構……7

2．出土遺物……10

A．弥生時代の遺物……10

B．歴史時代の遺物……13

IV．まとめ……18

1．出土遺物の検討……18

A．溝4出土土器群……18

B．溝6出土の土器……19

2．検出遺構の検討……20

A．弥生時代の溝……20

B．歴史時代の溝……21

3．まとめにかえて……22

写　真　図　版

図版１．調査地全景（北東より）
　　溝１（東より）
図版２．溝６（北より）
　　溝１土器出土状況
図版３．溝４土器出土状況
　　溝５遺物出土状況
図版４．溝４出土土器

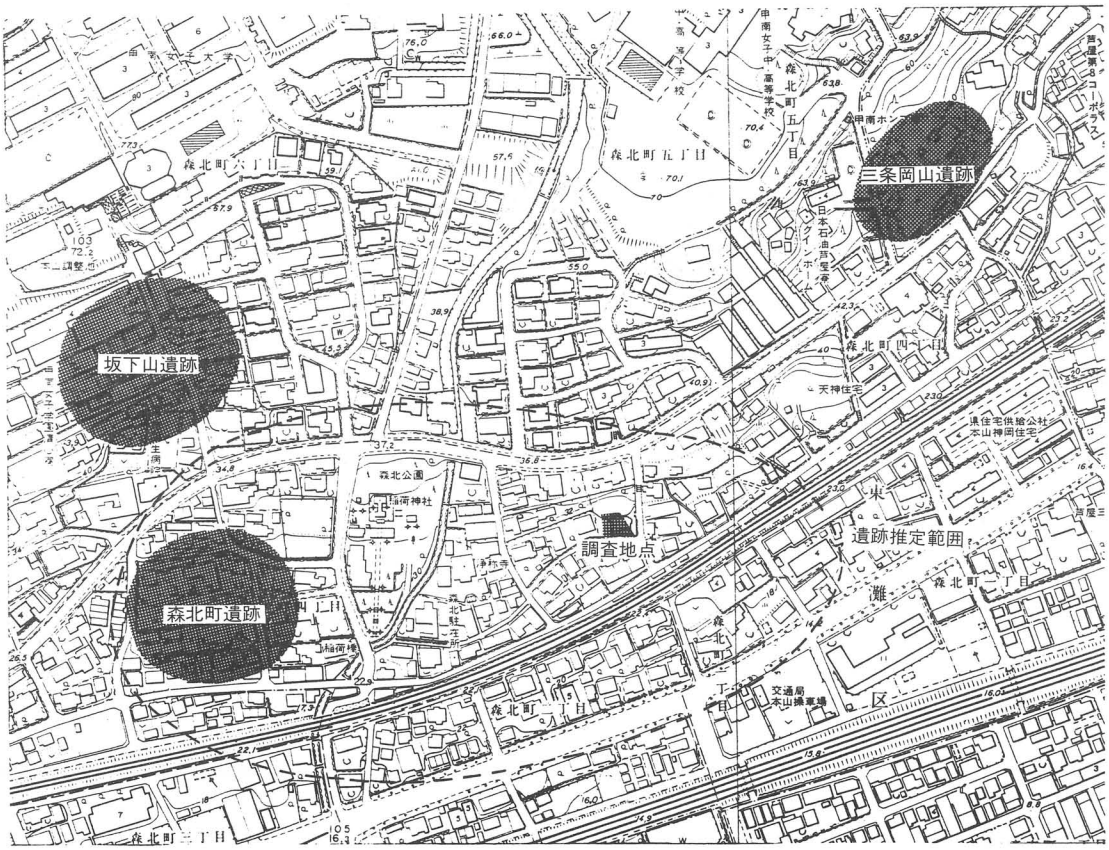
挿　　図

頁
第１図　調査地位図……1
第２図　周辺の弥生遺跡……2
第３図　トレンチ設定図……6
第４図　トレンチ西壁層図……7
第５図　溝４土器出土状況図……8
第６図　森北町遺跡遺構図……折り込み
第７図　溝５土器出土状況図……9
第８図　溝６土層断面図……9
第９図　弥生土器実測図……11
第10図　弥生時代遺物実測図……13
第11図　溝６出土土器実測図……15
第12図　包含層出土土器実測図……17

Ⅰ はじめに

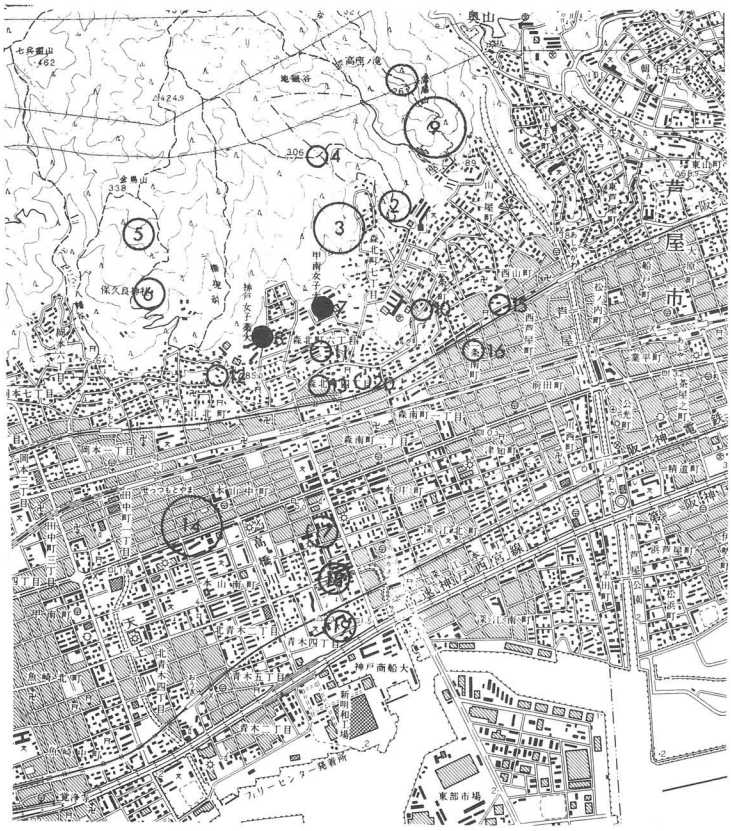
位置　森北町遺跡は神戸市の東部，神戸市東灘区森北町に所在し，住吉川の支流都市小河川高橋川の左岸に位置する。弥生時代の高地性集落址として著名な会下山遺跡[1]が所在する山稜から西南に派生する丘陵の東南斜面にひろがる遺跡である。標高は海抜28.3mを測る。

遺跡の範囲　昭和39年に森北町４丁目23番地において浄化槽設置工事が行われた際，弥生時代後期の長頸壺など多量の土器片が発見され，はじめて森北町遺跡の存在が明らかにされた[2]。また，今回の調査地から西方200mに所在する森稲荷神社前でサヌカイト片の散布がみられ，南側の都市計画道路山手幹線の工事中に土器片が採集されている。以上から推定すれば，森北町遺跡は森稲荷神社を中心にして，東西400m，南北250mにわたる範囲が弥生時代の遺跡と考えられる。



第Ⅰ図　調査地位置図

調査に至る経過　今回の調査は日本放送協会東灘世帯寮新築工事に先立って実施した。昭和56年6月22日付で日本放送協会大阪放送局より分布調査依頼書が提出された。当該地は周知の遺跡（森北町遺跡）の周辺にあたり，開発にあたっては事前に試掘調査が必要であるという旨を同協会に回答し，協議を行った結果，試掘調査を行うことになった。試掘調査の結果，建設予定地の北半分では遺物包含層はすでに削平され，遺構は存在していなかった。南半部においては良好な遺物包含層及び土壙状の落ち込みを確認した。このため，建設予定地南半部約200m²について，本格的な発掘調査を実施した。



1．城山遺跡
2．会下山遺跡
3．森奥遺跡
4．東山遺跡
5．金鳥山遺跡
6．保久良遺跡
7．森銅鐸出土地
8．生駒銅鐸出土地
9．城山南遺跡
10．三条岡山遺跡
11．城下山遺跡
12．垣の内遺跡
13．森北町遺跡
14．本山中町遺跡
15．芦屋廃寺下層遺跡
16．西良手遺跡
17．井戸田遺跡
18．本山南町遺跡
19．深江北町遺跡
20．今回調査地

第2図　周辺の弥生遺跡

II　周辺の弥生遺跡

森北町遺跡の所在する地域は六甲山南麓に属し,海岸線まで南に約1.5km,南側にひろがる平野部は芦屋川と住吉川によって形成された複合扇状地と考えられる。住吉川と芦屋川にはさまれた地域は，近年，発掘調査や工事中の立会調査などによって，新たな資料が増加しつつある地域である。以下，住吉川左岸と芦屋川右岸の主要弥生遺跡を遺跡の立地条件・性格にもとづいて概述し，森北町遺跡の歴史的性格を推測しうる資料としたい。

A．高地性集落

城山遺跡[3)]　鷹尾山山頂250mに位置する。住居址１棟が試掘調査によって確認されている。時期はIII様式～V様式までの長期にわたるものと考えられる。

会下山遺跡[4)]　鷹尾山の西，城山遺跡と一つ谷を隔てた尾根上標高199.2mに位置する。住居址８棟，ソトクド址４カ所，祭祀址２カ所，倉庫址１棟，物置址３カ所，土壙墓６基以上，柵址１列，埃捨址１カ所など，一集落を構成する遺構が検出されている。遺跡の時期はIII様式～V様式の長期にわたるものと考えられる。

本山町東山遺跡[5)]　甲南女子大学の北裏山，標高220m～260mに位置する。昭和59年５月に試掘調査を行った結果，住居址１棟の存在が明らかになっている。時期はV様式と考えられる。

森奥遺跡[6)]　東山遺跡の西隣の尾根上標高200m～240mに位置する。土器の散布がみられる。時期はV様式である。

金鳥山遺跡[7)]　保久良神社裏山の金鳥山山頂から南にのびる尾根上標高200m～220mに位置する。遺構は住居址２棟が検出されている。時期はIV様式と考えられる。

B．斜面に立地する遺跡

城山南麓遺跡[8)]　標高60m～160mの山麓緩斜面に位置する。高坏形土器が出土している。時期はIII様式新段階からIV様式と考えられる。

三条岡山遺跡[9)]　神戸市東灘区と芦屋市の境界近くの丘陵緩斜面上標高50mに位置している。時期はV様式の終り頃と考えられる。

坂下山遺跡[10)]　森北町遺跡の北西600mの標高70m～90mの尾根傾斜面に位置する。時期

はIII様式からIV様式と考えられる。

垣の内遺跡[11]　生駒銅鐸出土地の南東方向に展開する丘陵緩斜面に土器の散布がみられる。時期については不明である。

C．沖積地の遺跡

沖積地における弥生遺跡は，高橋川と要玄寺川という小河川にはさまれた自然堤防上に北から井戸田遺跡[12]，本山南町散布地，深江北町散布地[13]，本庄小学校内遺跡[14]などが点在し，弥生土器片が出土している。いずれも表面採集によるものや工事中における立会時に遺物が出土した地点で，時期等については不明であるが，一連の自然堤防上に展開される遺跡と考えられる。

本山中町遺跡[15]　これら一連の弥生遺跡の西方600mに本山中町遺跡が位置している。昭和58年7月と10月に2地点で調査が実施された。その結果，大溝等からII様式からIII様式までの弥生土器が多量に出土した。住吉川左岸扇状地に展開する弥生時代中期の大遺跡と考えられる。

芦屋川周辺では，丘陵と沖積地の傾斜変換線上に，芦屋廃寺下層遺跡，西良手遺跡がある。

芦屋廃寺下層遺跡[16]　芦屋廃寺址の整地層下に薄いながらも弥生時代の遺物包含層が遺存し，遺物包含層内から，鉢形土器，細長頸壺頸部，底部片2点が検出している。これらの出土土器から時期はV様式末葉と考えられる。

西良手遺跡[17]　森北町遺跡の南東方向300mに位置する。磨製蛤刃石斧1点が出土している他は，遺跡の規模や性格などは不明である。

D．祭祀関係遺跡

保久良遺跡[18]　金鳥山の中腹，通称保久良山と呼ばれる標高182.5mの山頂に位置する。山頂は神社となり原状を保っていないが，「磐境」の巨石が存在している。巨石付近より，中鋒銅戈が出土し，散在する土器片からIII様式からV様式までの時期のものと考えられる。

森銅鐸出土地[19]　坂下山遺跡北方の山腹に位置している。銅鐸は外縁付紐II式に属する四区画袈裟襷文鐸で，年代的には古の新段階に比定されている[20]。

生駒銅鐸出土地[21]　森銅鐸出土地の西方，小支谷を隔てた尾根部南斜面に位置する。現在，当該地は神戸女子薬科大学の薬草園となっている。出土銅鐸は扁平紐式[22]に属する六区画袈裟襷文鐸である。銅鐸の出土地点周辺には，十数個の石組

があり，石組に含まれる１m大の巨石の西側から銅鐸が出土したらしい。

以上のように当地域は，芦屋市域を含めて，六甲山南麓において弥生遺跡が集中して分布する地域であるといえる。特に森北町遺跡は会下山遺跡に連なる丘陵傾斜面に占地し，背後の丘陵に森銅鐸出土地点，生駒銅鐸出土地点などの祭祀関連遺跡をひかえ，南側前面には，自然堤防上に，井戸田遺跡，本山南町散布地などの一連の弥生遺跡が所在する。これらの点から森北町遺跡における調査は，周辺の弥生遺跡の歴史的性格を考えるうえで重要と考えられる。しかしながら，芦屋市会下山遺跡以外には，遺跡の性格を把握できた調査は少ない。その中で，今回の森北町遺跡における調査は重要な意味をもつものといえる。

註　1）村川行弘・石野博信『会下山遺跡』芦屋市教育委員会　1964年

2）村川行弘・森岡秀人『新修芦屋市史』資料編１芦屋市役所　1976年

3）村川行弘「芦屋城山遺跡調査概報」『芦屋市文化財調査報告』第１集　芦屋市教育委員会　1959年

4）村川・石野前掲書（註１）

5）神戸市教育委員会調査　1985年

6）1974年５月，森岡秀人氏採集。村川行弘・森岡秀人「三条岡山遺跡」『芦屋市文化財調査報告』第10集

7）石野博信「神戸市金鳥山遺跡－保久良神社銅戈出土地点の裏山」『古代学研究』48　1967年

8）村川・森岡前掲書（註２）

9）村川行弘・森岡秀人「三条岡山遺跡」『芦屋市文化財調査報告』第10集　芦屋市教育委員会　1979年

10）村川・森岡前掲書（註２）

11）村川・森岡前掲書（註２）

12）田岡香逸「保久良神社遺跡と遺物」『本山村誌』1953年

13）神戸市教育委員会編『神戸市文化財分布図』　1984年

14）神戸市教育委員会立会調査実施

15）下条信行『神戸市本山中町遺跡発掘調査報告』平安博物館　1984年

16）村川行弘「芦屋廃寺址」『芦屋市文化財調査報告』第７集　1970年

17）村川・森岡前掲書（註２）

18）樋口清之「摂津保久良神社遺跡の研究」『史前学雑誌』第11巻第２・３号　1942年

19）村川行弘・三木文雄「神戸市東灘区本山町森字坂下町出土銅鐸」『桜ケ丘銅鐸・銅戈調査報告書』兵庫県教育委員会　1969年

20）佐原真「銅鐸の鋳銅」世界考古学大系２　日本II　平凡社　1960年

21）村川行弘「神戸市東灘区本山町中野字生駒出土の銅鐸」『考古学雑誌』第51巻第２号　1965年

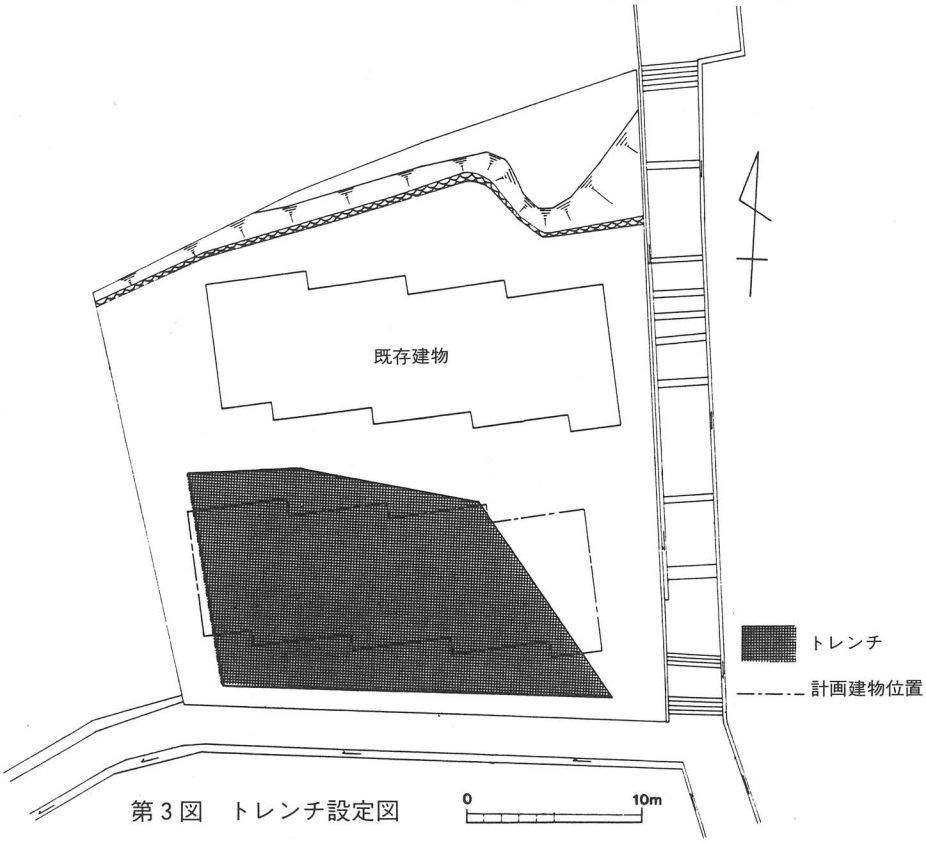
22）佐原前掲書（註20）

III 調査概要

調査地の現状　調査地は大正時代に宅地化されている。調査地内で高位にあたる北側は削平され崖状となっている。また，調査地の南側は市道になり，宅地との境界線上には石垣が構築され，L形に削り取られている。宅地内は厚さ1.4mもの盛土がなされている。盛土の直下には，ほぼ水平に旧耕作土が堆積し，大正時代以前にはすでに水田化され旧地形がそこなわれていたことをうかがわせる。また，調査地の中央部では南北に下水管の掘形がうがたれ，攪乱を被っている。

層　序　調査地の北半約3mまでは旧耕作土直下に礫を含む赤褐色粘性砂質土の地山となる。地山は南にいくにしたがって緩やかに傾斜し，地山上には，褐色砂質土（中世遺物包含層），旧耕作土直下の床土（黄褐色砂質土）が堆積している。

なお，調査地の南西隅では自然地形と考えられる地山の落ち込みを検出した。この落ち込みを埋めて中世の遺構面が造成されている。



第3図　トレンチ設定図

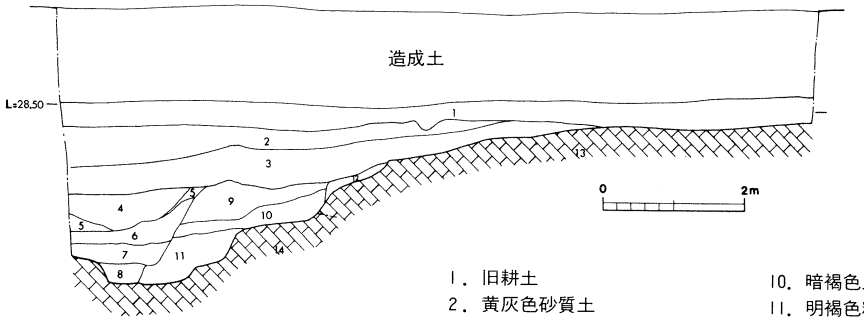
1．検出遺構

今回検出した遺構は，赤褐色粘性砂質土を掘り込んだ状態で検出した弥生時代の溝状遺構５条，一部整地面上から掘り込まれた中世の東西溝１条を検出した。

溝　1　調査地西部で検出した「L」形に折れ曲がる断面U字形の溝である。溝の北東コーナーは下水管敷設時の攪乱によって破壊されている。溝の幅は北部で1.3m，東部で1.7mを測る。深さは約0.4mを計測する。溝の南部は中世の溝である溝６によって破壊され，東部は宅地造成時の石垣掘形によって消滅している。東北コーナー付近の溝埋土上層から櫛描波状紋を施す壺形土器の肩部，東辺中央部の溝底には大型の壺形土器の底部片がすわった状態で出土した。

溝　2　調査地東部中央において，やや弧状に掘られた東西溝である。西側で溝１に接続し，溝１との切り合い関係は認められない。東側は後世の攪乱によって破壊されている。溝の断面形はU字状を呈し，幅1.1m，深さ0.3mを計測する。溝の埋土内より弥生土器の底部片が出土した。

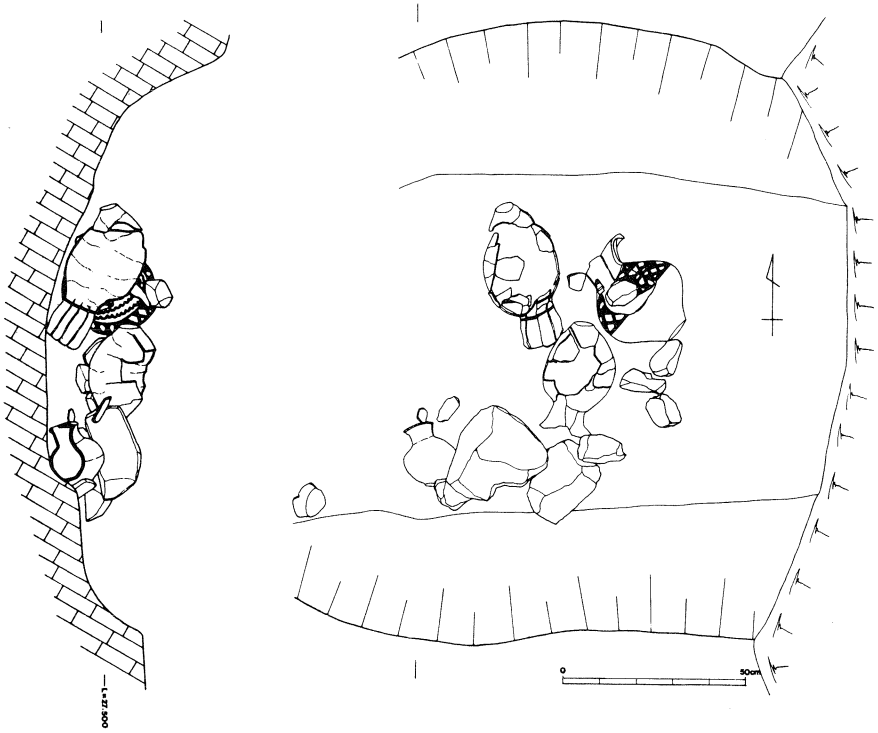
溝　3　南側を溝２によって切られ「L」形に残る断面U字形の溝である。高位にあるため削平されたと考えられ，幅0.7m，深さ0.2m程度の浅い溝となっている。溝の東部は攪乱によって欠失している。溝の埋土内から弥生土器の長頸壺形土器１個体，壺形土器体部片が出土している。



第４図　トレンチ西壁土層図

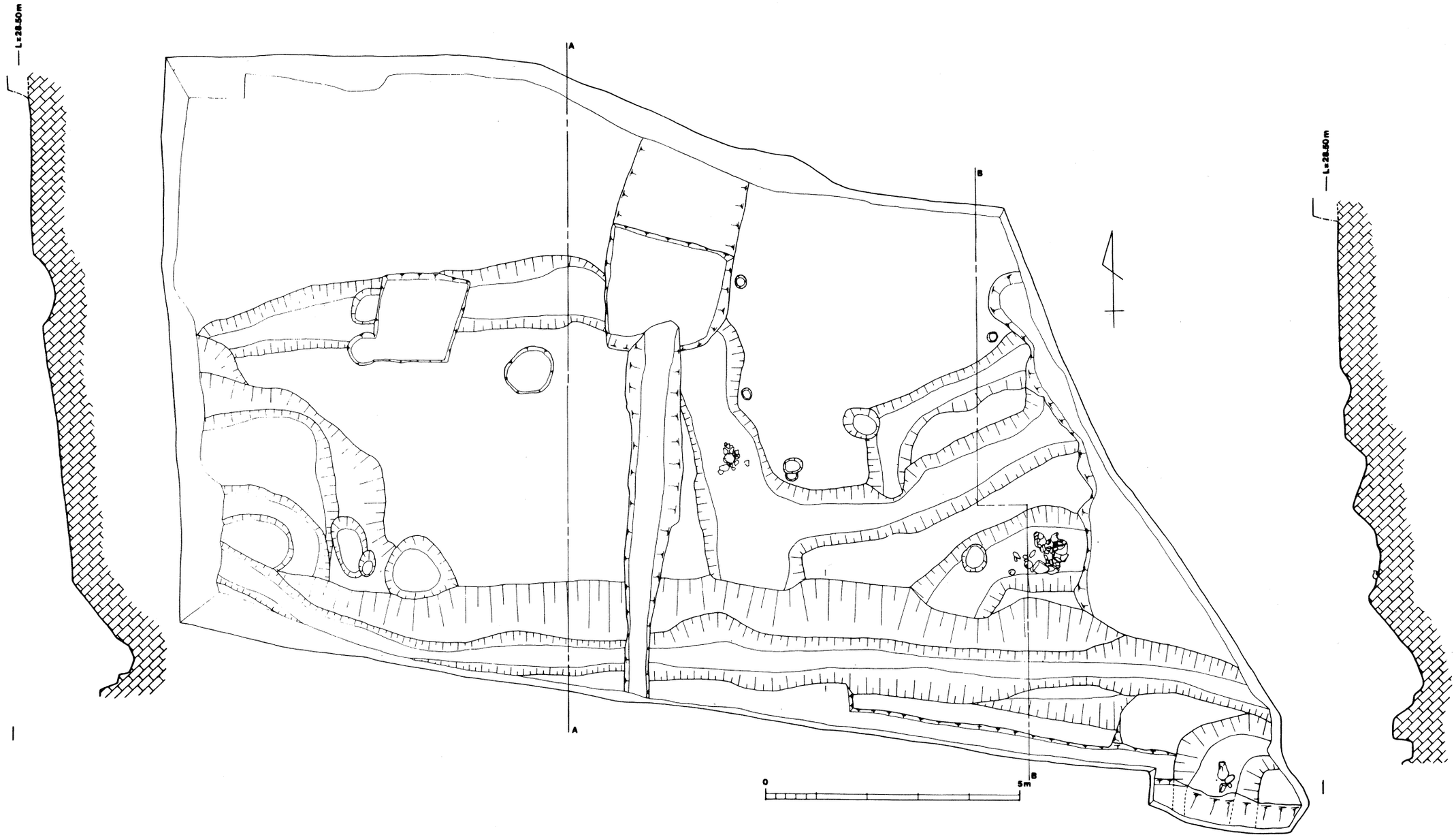
1．旧耕土
2．黄灰色砂質土
3．褐色砂質土
4．暗灰色砂質土
5．黒灰色砂質土
6．灰褐色砂質土
7．暗灰色粘性砂質土
8．暗褐色土（淡褐色土ブロック含）
9．褐色粘性砂質土
10．暗褐色土(黒灰色土ブロック含)
11．明褐色粘性砂質土(中世土器含)
12．暗褐色粘性砂質土
13．赤褐色粘性砂質土(礫含)
14．黄褐色粘性砂質土(礫含)

溝　4　　溝2の南側に位置する幅1.7m，深さ0.4mの鍵状に曲がる溝である。溝の断面形はU字状を呈する。溝のコーナーのやや東側に，弥生時代の壺形土器4個体，器台形土器が交互に横倒しになった状態で出土した。溝の南側は歴史時代の溝6及び宅地造成の際に石垣掘形によって欠失している。溝の東部は攪乱壙によって失われている。

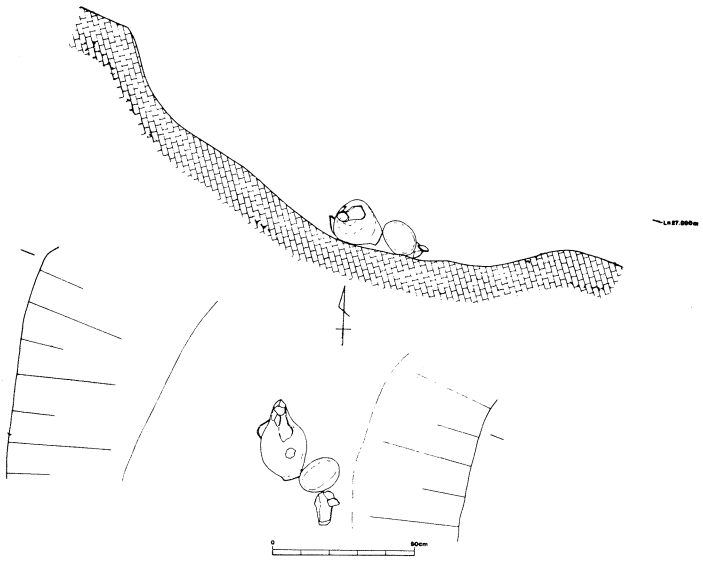


第5図　溝4土器出土状況図

溝　5　　調査地の東南部コーナー付近で，幅1.7m，深さ0.3mの「L」形に折れ曲がる溝のコーナー部のみを検出した。溝の断面形はU字形を呈する。溝のコーナー部のやや南に弥生時代の壺形土器1個体，敲き石状石器1点が溝底から出土した。溝の南側は宅地造成の際の石垣掘形で破壊され，東側の一部は溝6によって欠失している。

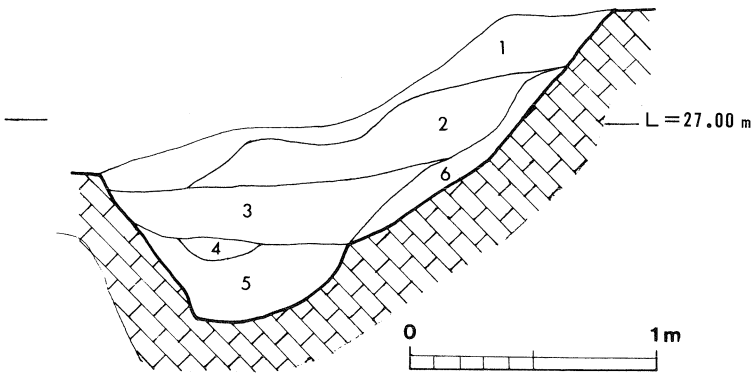


第６図　森北町遺跡遺構図



第7図　溝5土器出土状態

溝　6　　調査地の南辺沿いに走る東西溝である。溝の断面形はロート状を呈する。溝の上端における幅は，溝の南肩が宅地造成の際に石垣掘形によって削平されているため明確ではないが，図上における復原推定によれば，幅約2.5mの規模を有するものと考えられる。溝下段の幅は0.75m～1.6m，溝底幅0.2m～0.4m，深さは現存約1.5mを計測する。溝内からは，歴史時代の土師器皿，堝，瓦器埦，皿，須恵器埦，鉢，壺，黒色土器埦，陶器壺などが埋土上層より出土している。なお，調査地西南部では，自然地形と考えられる落ち込みを埋め立てた後に，溝6が掘り込まれていることを西壁断面（第4図）で検証した。



1．暗灰色砂質土
2．黒灰色砂質土
3．灰褐色砂質土
4．淡褐色砂
5．暗褐色粘性砂質土
6．暗黄灰色土

第8図　溝6土層断面図

2．出土遺物

弥生時代　出土遺物を時代別・遺構別に列挙すると以下のとおりである。

溝1　壺形土器体部片，底部片1。

溝2　壺形土器底部片1。

溝3　長頸壺形土器1，壺体部片。

溝4　壺形土器4，器台形土器1。

溝5　壺形土器1，敲き石状石器1。

包含層　石鏃1，底部片。

歴史時代

溝6　須恵器（壺口縁部1，壺頸部1，埦3，鉢1），土師器（皿5，埦2，堝1），瓦器（埦4，皿1），黒色土器（埦1），陶器（壺体部片）。

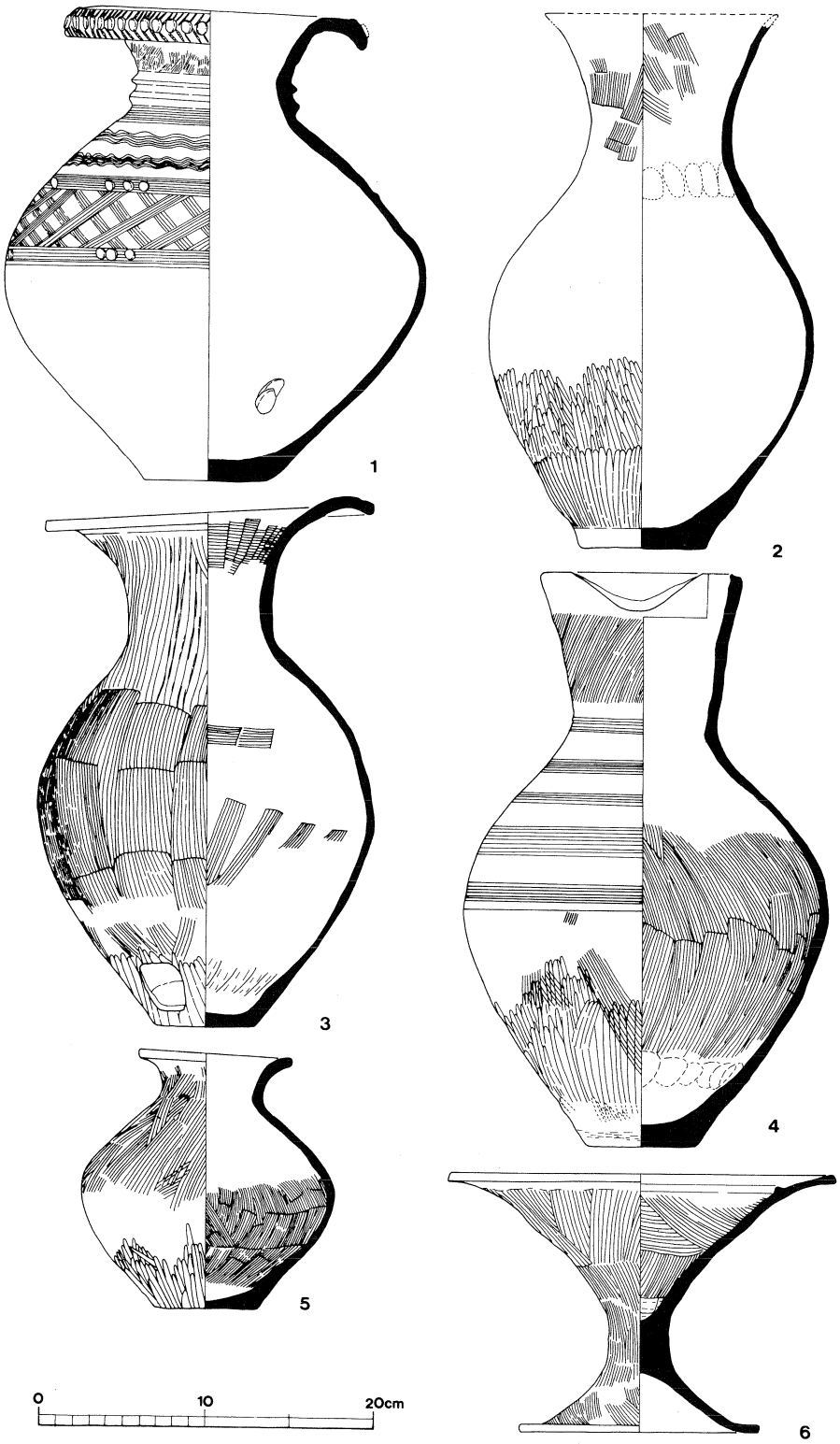
包含層　須恵器（埦9，壺底部1，壺口縁部1，鉢口縁部1，鉢底部1），土師器（皿2，埦1，羽釜5，堝1），瓦器（埦2），黒色土器（埦1），陶器（壺底部1）。

A．弥生時代の遺物

溝5土器群　広口壺（1）はやや「く」の字に斜め外方にたちあがる頸部に，斜め下方に垂下する口縁部をつける。口縁部端は櫛状工具による綾杉紋をめぐらし，円形浮紋を貼付する。頸部には2条の断面三角形の突帯を貼りめぐらせる。胴部はソロバン玉形で，肩部には直線，波状，斜格子の櫛描紋をめぐらせる。なお，直線紋上には3個一組の円形浮紋を貼りめぐらせる。胴体部下半には，焼成後の穿孔1カ所がある。器壁の調整は，頸部に細かいハケ調整，胴部下半はていねいなヘラミガキを行う。

広口壺（3）はやや下半に最大径をもつ丈高の体部に斜め上方にたちあがる頸部と水平にひらく口縁部をもち，口縁端は面をつくる。口縁部内面には，幅広の凹線がめぐる。調整は器表面全体に荒く縦方向の刷毛目を施し，胴部はさらに刷毛調整，底部はヘラミガキを行う。胴部内面は刷毛調整，底部内面にはヘラケズリを施している。焼成後，底部に方形の穿孔をうがつ。

広口壺（5）　ソロバン玉形の胴部に，短く外方にたちあがる口頸部をもつ小型の壺である。外面は荒く刷毛調整したあと，口頸部と胴部下半に



第9図　弥生土器実測図

ナデ・ヘラミガキの調整を施している。内面は刷毛調整のあと，口頸部，胴部上半はナデ調整を施している。

長頸壺（4）　張りのある胴部に直線的に外上方にたちあがる口頸部をとりつけ，やや内側上方に拡張させた口縁端部をつくる。口縁部には口径の5分の1程度を浅く抉り取り片口がつけられる。頸部から胴部上半に5帯の櫛描直線紋をめぐらせる。調整は全体に刷毛調整のあと頸部をのぞきナデ消し，胴部下半はヘラミガキを行う。内面も全体に刷毛調整を施したあと頸部・胴部上半はナデ消している。胴部下半に焼成後の穿孔がある。

高坏（6）　坏部は中央で細くくびれて外上方に直線的にたちあがり，内面に断面三角形の突帯を貼りめぐらせている。脚部は大きく開く。器面の調整は外面を三段に分けて刷毛調整を行う。坏部内面は底部を除いて刷毛調整したあと，口縁部内外面を一括してナデ調整を行う。脚部内面は，器壁の保存状態が悪く調整不明である。

溝5出土遺物　長頸壺（2）　張りのない胴部にやや外方向にたちあがる長い口頸部をつける。比較的薄手の胴部である。口縁部は欠失しているため不明であるが，片口をつけるタイプと考えられる。外面胴部下半はヘラミガキ，口頸部は内外面とも刷毛調整を行う。

敲石（13）　平面形は楕円形を呈する。長軸の一方のみに打撃痕がみとめられる。使用石材は砂岩質である。

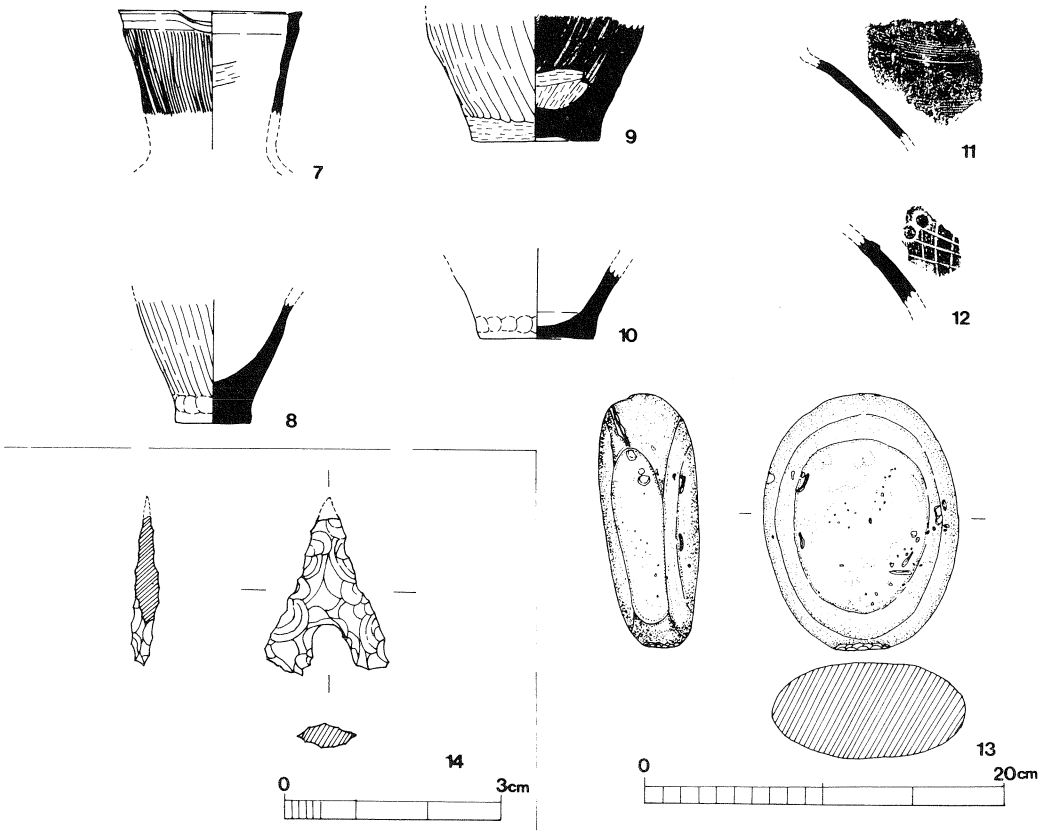
溝3出土遺物　長頸壺（7・8）　口頸部（7）と胴部下半（8）が別々に出土し，胴部上半を欠くが，器形・胎土等から同一個体と考えられ，溝4出土の長頸壺（4）と同型式の小型品と考えられる。口頸部はヘラミガキのあと口縁部内外面を強くナデて，口縁端をつまみあげて平坦面をつくる。さらに，一部口縁部を折り曲げて片口をつける。口頸部内面は斜面上方向へのヘラケズリを行う。胴部下半内面はたて方向のヘラミガキ，底部は指でおさえ，あげ底につくる。内面は刷毛調整を行う。

他に壺形土器の肩部と考えられる土器片（12）がある。外面にヘラによる斜格子紋を施し，円形浮紋を貼りつける。

溝2出土遺物　壺形土器の底部片（9）が出土している。外面はヘラケズリのあと上部をヘラミガキする。底部内面はたて方向のヘラケズリを行い，上部はていねいな刷毛調整を施す。底部はドーナツ状に中央部が凹む。

溝1出土遺物　（11）は櫛描きによる直線紋（9条）を2帯に施す壺形土器の肩部と考えられる小破片である。他に大型壺形土器底部片がある。

包含層出土遺物　土器の底部片（10）と石鏃（14）がある。



第10図　弥生時代遺物実測図

底部片は全体にナデ仕上げを行い，底部は上底気味につくる。石鏃は凹基無茎式のサヌカイト製打製石鏃である。刃部先端と逆刺の一部を欠損する。

B．歴史時代の遺物

溝6出土遺物（第11図）

須恵器（15）は頸部からすぐ外上方にのびる口頸部をつける壺である。壺の口縁部端は外下方に折り曲げて端面をつくる。須恵器の埦には糸切り平底の底部に体部が直線的にたちあがるもの(17)。体部が内湾気味にたちあがり，口縁部を外につまみだすもの(18)。偏平な円板状の高台をつけ糸切りするもの（16）がある。(19) は甕の頸部と考えられる。肩部外面はカキ目調整，口頸部はナデ調整を行う。肩部内面は青海波叩きが見られ，口頸部は叩きをナデて消している。(20) は鉢の口縁部片である。やや内湾気味にたちあがる体部に，強くナデて外下方に端面をつくる。全体にロクロによるナデ仕上げを行う。

土師器　(26) は中型の土師器皿である。内湾する体部に断面三角形の口縁部をつける。全体にナデ調整を行う。小型の土師器皿 (27・28・30) は平らに底部をつくり，体部は内湾気味にたちあがり，口縁端部は丸くおさめる。全体にナデ調整を行う。(29) は凹み底の底部に，外反し上方につまみあげる口縁部をつける。(31・32) は高台をつける土師器埦の底部である。やや小型の (31) はやや高台がふんばり，大型の (32) は直立する高台をつける。甕 (33) は「く」字状の頸部に外上方にひらく口縁部をつける。口縁端部は上方につまみあげて面をつくる。口頸部は指おさえで調整を行い，体部は荒い刷毛調整を行う。内面は口頸部と体部を分けてヨコハケ調整を行う。

瓦　器　(21) はやや内湾しながらたち上がる体部中央に沈線が一条走る。高台は台形状を呈する。内面はヘラミガキ，外面は沈線より下は指おさえによる調整を行う。(22) は内湾する体部と口縁部の境に稜がみられる。外へふんばる高台をつける。体部外面下方は波状のヘラミガキ，口縁部外面は横方向のヘラミガキを行う。内面は底体部ともていねいなヘラミガキを施す。(23) は比較的口径に対して器高の低い器形を呈する。高台はやや外にふんばる。器壁の遺存状態は非常に悪いが，内外面ともわずかにヘラミガキの痕跡を残す。(24) は台形状の高台をつける，埦の底部片である。(25) は平底の底部に内湾する体部をつけ，口縁部は外方向にひらく瓦器皿である。底体部外面は指おさえを施し，内面はヘラミガキを行う。

黒色土器　(34) は平底の黒色土器の埦底部である。底部は糸切りを行い，内面は全面に炭素の吸着がみられる。

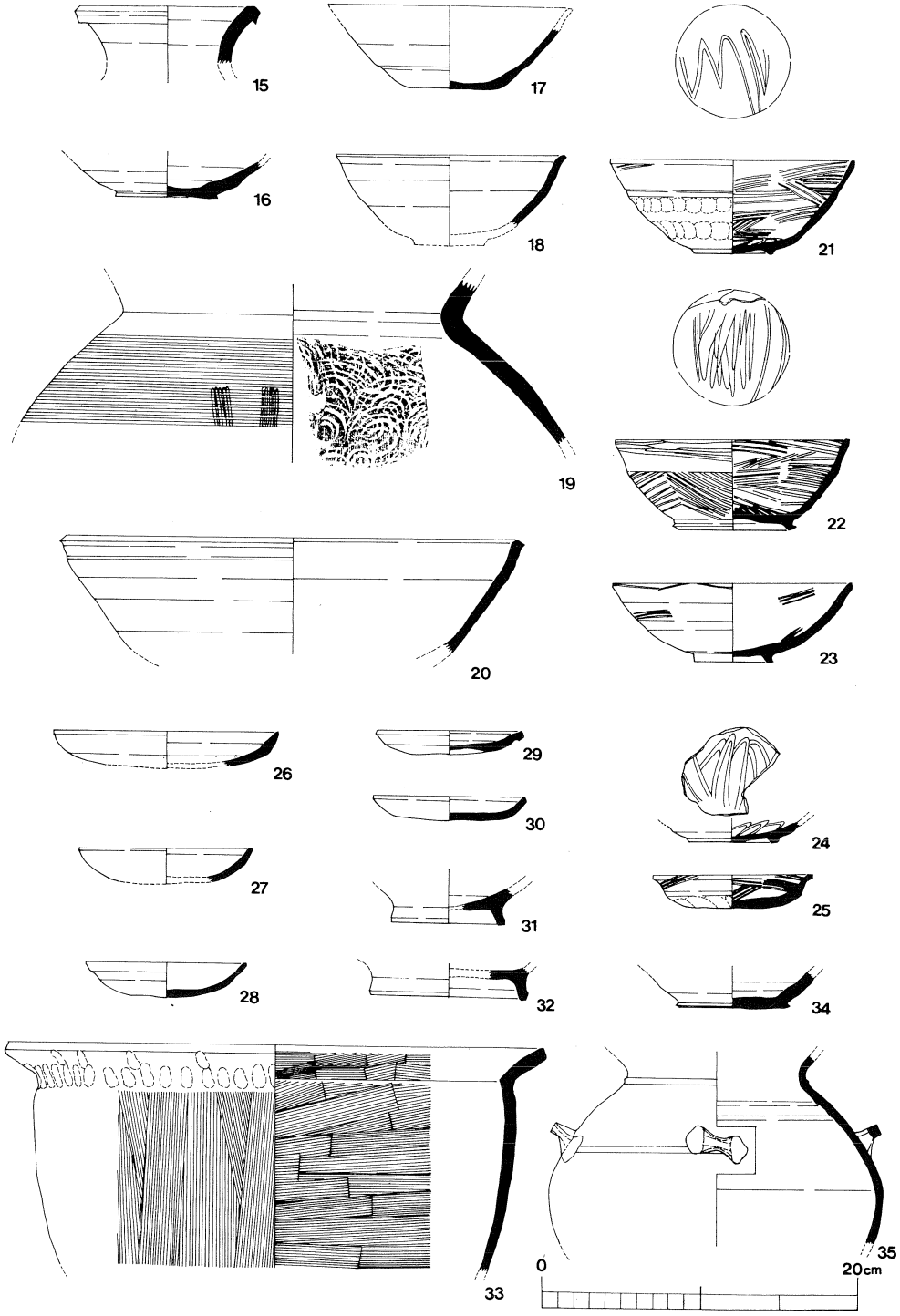
陶　器　(35) は丸い体部に外反する頸部をつける四耳壺である。全面に暗黄褐色の釉薬が施される。古瀬戸系の陶器と考えられる。

包含層出土遺物
(第12図)
須恵器

埦 (35〜44)　(36) は外上方に直線的にたちあがる口縁部片である。(37〜41) は円板状の高台をつけ，糸切りして平底につくる。口縁部の明確なもの (37) はやや内湾気味にたちあがる口縁部をもつ。(42・43) は薄くひらたい円板状の高台をつけ，丸味をもって内湾する口縁部をつける。いずれも糸切りをしている。(44) は断面三角形状の高台をつける。つくりの荒い埦底部である。

壺 (45・48)　やや中央で凹む平底の底部にやや内湾する体部をつける壺の体底部片である。ロクロ目が明瞭に残る。(48) は壺の口頸部で体部を欠失している。体部との境は凹線によって段をつけて画している。口縁部は外側へ水平に拡張して端面をつける。頸部にはヘラ描きの波状紋を施す。

鉢 (46・47)　(46) は外上方にのびる体部に，上下方に拡張した口縁



第11図　溝6出土土器実測図

部をつける鉢の口縁部片である。(47) はやや凹み底の鉢の底部片である。糸切りによって切りはなされている。

土師器皿　(49・50)　(49) は平底で，体部は直線的に外上方にたちあがる。(50) は中型の皿で体部は内湾する。溝6出土の中型皿(26)より深い体部をもつ。

　椀 (51) は高台をもつ椀の底部片である。外へふんばる高台をつける。

　羽釜 (52・54・55・56・60)　(52) は内傾する羽釜の口縁部片である。口縁部の下に断面三角形の突帯をめぐらせる。口縁部端は内傾して面をもつ。(54) は外上方に直線的にのびる体部に鍔・口縁部をつくる。鍔は，ほぼ水平につくり，下面の接合部に粘土を貼りつけて補強する。口縁部はやや内傾し，口縁部端は内傾した面をもつ。体部は横方向のヘラケズリ，内面は刷毛調整を行う。口縁部外面は強くナデて4条の凹線をめぐらせる。(55) は内湾する体部に外上方にのびる鍔と内傾する口縁部をつける。口縁端部は内傾して面をもつ。外面はナデ調整，内面は刷毛調整を行う。(56) は (55) の小型品で，内傾する体部にほぼ水平な鍔とやや直立する口縁部をもつ。口縁端部は内傾する面をもつ。口縁部は内外面ともナデ調整し，外面では凹線を施す。体部外面は刷毛調整のあと削る。(60) は羽釜の外湾気味にたちあがる口縁部である。口縁端部は外下方につまんで端面をつくる。

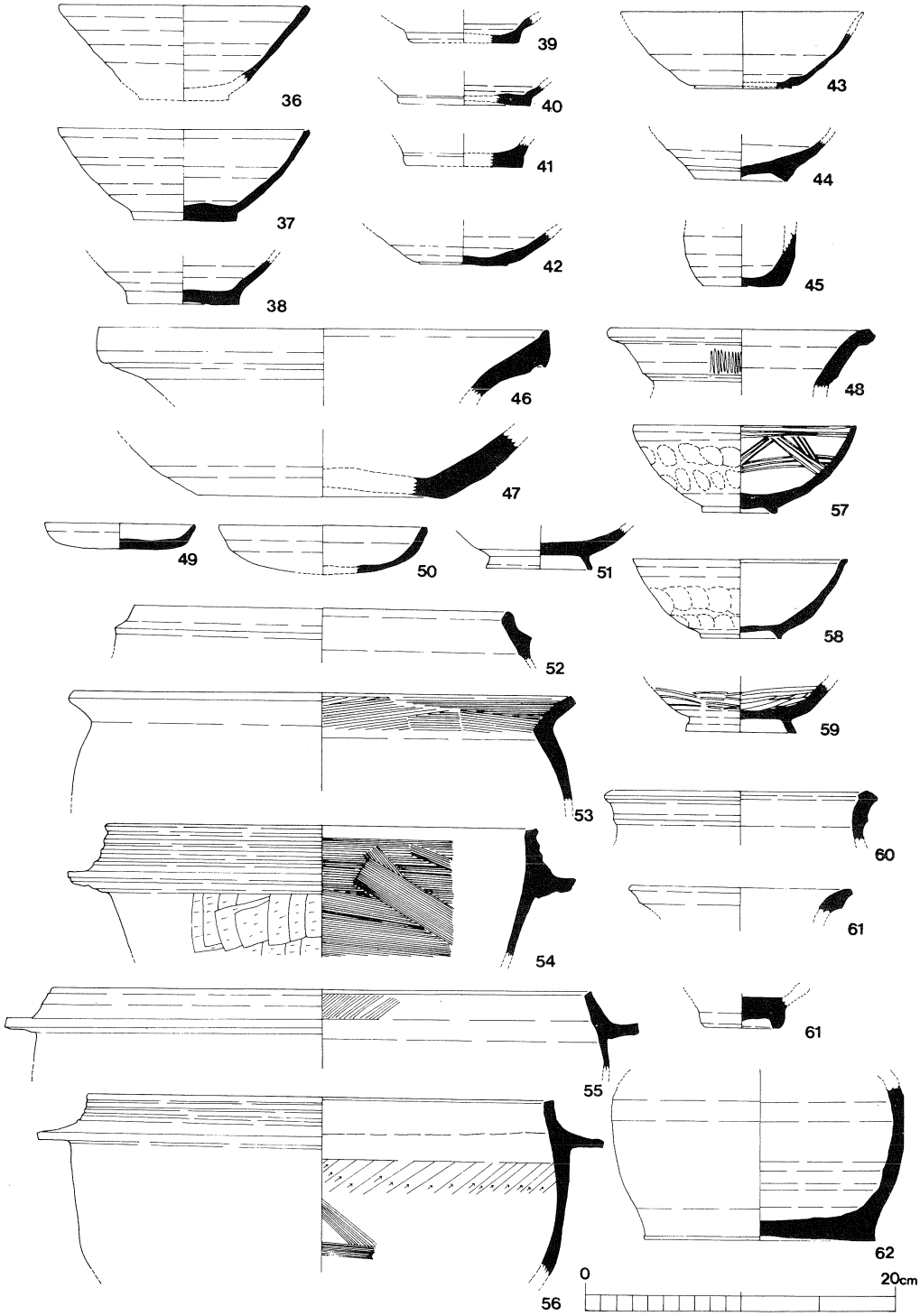
　堝 (53) は「く」字に屈曲する口頸部に角ばった口縁端面をつける。口縁部内面は刷毛調整，体部内面はナデ調整を行う。(61) は甕の口縁部と考えられる。

瓦　器　椀 (57・58)　(57) はやや内湾気味にたちあがる口縁・体部に台形状のやや外にふんばる高台をつける。口縁部外面はナデ調整を行い，体部外面は指おさえして調整する。体部内面は横方向に磨いたあと斜め方向に磨き，最後に口縁部を横に磨く。(58) は (57) と類似する体部にやや小型の台形状の高台をつける。高台は外にふんばらない。外面の調整は (57) と同じであるが，内面の調整は器壁の残りが悪く不明である。

黒色土器　(59) は高台をもつ椀底部片である。高台は高く外にふんばる。内外面はヘラ磨きを行う。

磁　器　青磁器 (61) は椀底部片である。外面全体に緑黄色の釉薬がかけられ，素地は灰白色である。高台は削り出しによってつくられる。高台端は角張り，沈線がめぐる。

陶　器　陶器 (63) は壺の底体部である。やや内に凹む平底に，内湾する体部をつける。底体部の境はヘラ削りを行う。



第12図　包含層出土土器実測図

IV まとめ

今回の森北町遺跡における調査は，発掘調査面積が狭小であったにもかかわらず，遺構・遺物とも多くの成果が得られた。以下溝4内で一括出土した弥生土器と，溝6内で出土した歴史時代の土器類について若干の検討を試みたい。そして，これらの遺物の検討から導き出される検出遺構の歴史的位置付けについて述べてみたい。

1．出土遺物の検討

A．溝4出土土器群

溝4内で一括出土した土器群は，尼崎市田能遺跡[1]・高槻市安満遺跡出土の土器[2]に類例がみられる。

広口壺（1）は田能遺跡第4調査区土壙2出土例に肩部と頸部に紋様構成が類似する例がある。ただし，口縁部の拡張が，広口壺（1）では外下方に広く拡張し，櫛状工具による綾杉紋と円形浮紋を巡らせるのに対して，田能遺跡出土例は外下方にわずかに拡張しただけで，加飾しない。一方，安満遺跡出土例においては，広口壺（1）と同様の紋様構成で肩部を飾り，口縁部を外下方に広く拡張して円形浮文をめぐらせるが，頸部において断面三角形状の貼り付突帯を省略している。一般に畿内第III様式においては，断面三角形状の貼り付突帯は第II様式の伝統を引く古い様相の加飾と考えられる。したがって，広口壺（1）は，紋様構成の上で古い様相をもちながら，口縁部のつくりにおいては新しい様相をもつ例と考えられる。

長頸壺（4）は，田能遺跡第4調査区鋳型ピット，神戸市新方遺跡大日地点[3]，神戸市今津遺跡[4]において類似した土器が出土している。新方遺跡大日地点及び今津遺跡例は共伴した壺形土器から弥生時代中期中頃（III様式古段階）と考えられている。特に，長頸壺（4）の特徴的な点は口縁部の一部を抉りとって片口状に加工している点である。こういった長頸壺は畿内でも類例は少なく，摂津地方における特長的な形態と考えられている[5]。

溝5出土の長頸壺（2）は，張りのない胴部をもつ点で長頸壺（4）とおもむきを異にするが，田能遺跡第4調査区鋳型ピット出土例，川西市栄根遺跡出土例[6]に類似する土器がある。

以上，類似する土器が出土した遺跡の検討から，おおむね，溝4内で一括出土した土器群と溝5出土の土器は，畿内第III様式古段階と比定できる。

B．溝6出土の土器

出土遺物の中で，残存状況が良好で個体数も多く，他の諸遺跡において最も編年研究の進んだ瓦器と須恵器について検討し，溝6出土の土器群の年代について考えてみたい。

瓦器　瓦器埦（22）は口径14.6cm，器高5.8cm，底径7.0cmで，器高指数39.2を測る。瓦器埦(21)は口径15.6cm，器高6.0cm，底径5.2cmで，器高指数38.4を測る。これらの瓦器埦の生産地の比定は行っていないが，高槻市内出土の楠葉産の瓦器について検討した橋本編年[7]によれば，上牧遺跡第1号土壙墓出土の瓦器埦に類例がみられる。橋本編年の器高指数40，Aタイプとされる瓦器埦である。瓦器埦（22）は内面の暗文の施法に粗さがあるが，高台のつくりなどの点からAタイプと同一型式のものと考えられる。瓦器埦（21）は内外面とも暗文の施法に粗さがめだち，高台も若干矮小化し，新しい傾向がみられる。

瓦器埦（23）は口径14.4cm，器高5.0cm，底径5.0cmで，器高指数34.7を測る。やや高台が小さく，新しい傾向をうかがわせるが，橋本編年の安満遺跡第23号井戸出土の瓦器埦（器高指数36）Bタイプに近い形態のものと考えられる。

瓦器皿（24）は，口縁部を強くナデ調整して外反させるタイプで，橋本編年のA・Bタイプの瓦器埦に共伴するものと考えられる。

須恵器　須恵器は，胎土・色調から神出古窯址産[8]のものと考えられている埦(16・17・18)，鉢（20）がある。

鉢（20）は口縁部を外下方につまみだす製作技法をもち，森田編年[9]の第I期第2段階の片口鉢に相当する。これは共伴する埦底部（16・17）が平底で見込み部で凹みをもち，円板状の底部上面から粘土紐巻き上げによって成形している点からも比定できる。

この鉢（20）に類似する例として，若干時期がさかのぼるが，平安京左京四条一坊の調査[10]で発見された鉢がある。この鉢はSE－8の埋土内から出土し，底部に寛治五年（1091年）と墨書されていた。この鉢は体部が内湾し，口縁部は内上方につまみ出して端面をつくっている。森田編年においては，鉢（20）より一段階古い第I期第1段階に相当するものと考えられている。一方，このSE－8の掘形埋土より出土した瓦器に器高指数(36.

4・40.4）を測る橋本編年A・Bタイプのものがあり，Bタイプの下限を11世紀末葉とする根拠となっている。

年代の比定　以上の検討から，溝6出土遺物は，瓦器埦の示す橋本編年第1段階（11世紀後半～12世紀）から須恵器の示す森田編年第Ⅰ期第2段階（12世紀前半）にわたる年代が考えられる。これらのことは，土師器皿（29）の下限が平安時代Ⅲ期前半（おおむね12世紀初め）とする点[11]に矛盾しない。

2．検出遺構の検討

A．弥生時代の溝

弥生時代の溝は，調査地が限定されていたこと，後世の攪乱・削平などによって遺構の性格を十分に把握することはできなかった。しかしながら，溝1はL字状（方形状）にめぐり，溝2と切り合関係がない。したがって，溝1・溝2が同時期に互いに溝を共有しながら区画をつくって存在していた可能性が考えられる。また，溝4・溝5の鍵形に屈曲するコーナーにおける土器の集中した出土状況は，各地の方形周溝墓でみられる土器供献の出土状況に近似している。

一方，溝から出土した土器及び包含層から出土した土器の中に甕形土器は含まれず，いずれからも壺形土器・高坏形土器といった器種が出土している。この出土土器における器種構成は，煮沸用と考えられる甕形土器を欠き，貯蔵用乃至は供献用の土器である壺形土器・高坏形土器のみを出土している点で，今回調査地の検出遺構の性格を考える上で重要な意味をもつと考えられる。また，溝4・溝5で出土した壺形土器のすべてに焼成後の穿孔が底体部に施されている。これらの土器が，本来の用途に用いられた後に，孔が穿たれ，儀器として溝中に置かれたものと考えることができる。

弥生時代の溝の性格　以上，検出状況，出土土器の器種構成，出土土器における底体部穿孔の存在といった事象から，今回の森北町遺跡検出の弥生時代の溝は，集落等の生活に関連した遺構ではなく，方形周溝墓等に伴う墓域に関連した溝であると考えられる。

近接してつくられた溝1・2と溝4・溝5との間には，遺構の位置関係から，若干の時期差を考慮することができる。しかし，溝1から壺肩部片（11）が出土しているものの，出土土器が少量であるため，両者の新旧に

ついては速断することはできない。おおよそ，溝の時期は，出土土器から弥生時代中期中葉（畿内第III様式古段階）を中心にして営まれた考えられる。

B．歴史時代の溝

溝6は，断面ロート状に掘りこまれ，調査地西南部では自然地形を埋土して，ほぼ真東西に掘り込まれている点から，かなり計画的に掘削された溝と考えられる。

溝6の時期

溝6の時期は，溝埋土内出土土器の時期が11世紀後半～12世紀前半，溝の上層に被覆する包含層出土土器のうちに14世紀以降のものと考えられる須恵器鉢（46・47）を含んでいる点から，11世紀後半前後に溝6は掘られ，12世紀前半まで使用されていたと考えられる。そして，14世紀の段階にはすでに埋没してしまったものと考えられる。

溝6の歴史的性格

溝6の性格を考えるうえで，関連をうかがわせるものとして，調査地の西方，200mに鎮座する村社森稲荷神社がある。『西摂大観』[12]によれば，森稲荷神社は元正天皇霊亀元年（715年）の創祀と伝え，旧社域は1405坪[13]あったといわれる。

この創祀伝承の事実関係については，さらに検討の余地を残すが，現在の甲南回生病院付近と森北町遺跡発見の端緒となった立会調査地点（森北町4丁目23番地）において平安時代後期から室町時代の土器片が採集されている。これらの中世土器の散布のひろがりが，森稲荷神社の旧社域1405坪に相応するか否かは今後の調査において検討を重ねていく必要がある。

古代末期・中世の神社遺構については，全国的にみても過去の調査例は少なく，全貌を明らかにした例はない。付属施設として土塁・土壙等の検出例は，畿内でも数例ある[14]。今後，森稲荷神社周辺においても，神社に関連すると考えられる遺構等の検出が予想される。十分な問題意識のもとに調査を進める必要があろう。

3．結びにかえて

調査を終えて，早や4年の月日が流れた。森北町遺跡周辺においても，日々刻々と，マンション建設などの再開発の波が押しよせている。昭和61年3月，森北町6丁目の甲南回生病院跡地の発掘調査を神戸市教育委員会が実施した結果，弥生時代終末期の竪穴住居址から重圏文鏡や多量の土器が出土した[15]。森北町4丁目実施の立会調査出土の土器と同一時期の集落の一部と考えられる。

その結果，高橋川をはさんで，全く別個の性格をもつ遺跡のひろがりのあることが判明している。今後，森北町周辺は重点遺跡として性格を追求して行く必要があり，調査地点個々の連関をもった調査体制をひく必要性がある。

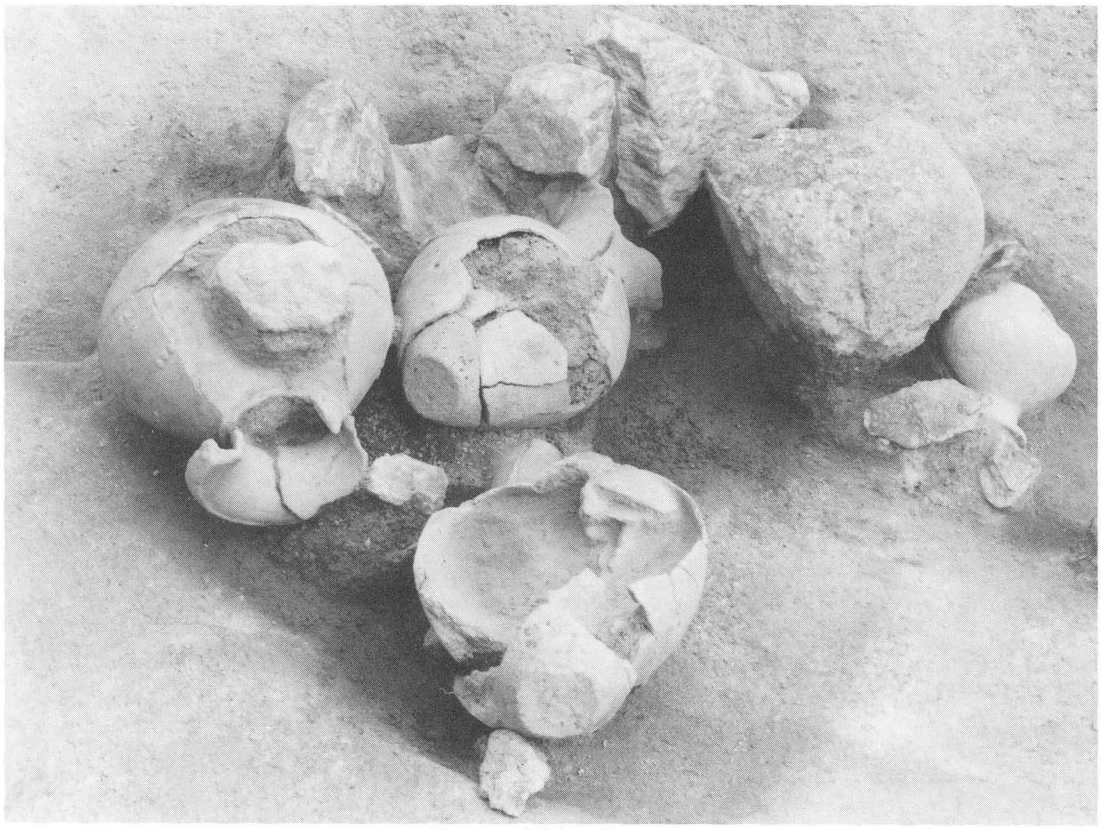
註 1）福井英治他「田能遺跡発掘調査報告書」『尼崎市文化財調査報告』第15集尼崎市教育委員会　1982年
2）森本六爾・小林行雄『弥生式土器聚成図録』正編
3）丹治康明「新方遺跡」『昭和57年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会　1985年
4）千種浩「今津遺跡」『昭和57年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会　1985年
5）福井英治他前掲書（註1）
6）川西市教育委員会『栄根遺跡』
7）橋本久和「中世日常雑器類の分析－高槻市における編年試案－」『大阪文化誌』第2巻第3号　1977年
8）丹治康明「神出古窯址群」『昭和57年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会　1985年
9）森田稔「神出古窯址群における製作技術の変化」『博物館だより』№13　神戸市立博物館　1985年
10）田辺昭三・吉川義彦『平安京跡発掘調査報告書－左京四条一坊－』平安京調査会　1975年
11）田辺・吉川前掲書（註10）
12）仲彦三郎『西摂大観』　1911年
13）武庫郡教育会編『武庫郡誌』　1921年
14）平良泰久他「平川廃寺発掘調査概要」城陽市埋蔵文化財調査概報第2集　城陽市教育委員会　1974年
安藤信策「且椋神社旧跡及び七ツ塚発掘調査概要」埋蔵文化財発掘調査概報　京都府教育委員会　1974年
西川卓志他「西宮神社境内地発掘調査報告書」文化財資料26号　西宮市教育委員会　1983年
15）神戸市教育委員会「森北町遺跡現地説明会資料」　1986年

調査地全景（北東より）

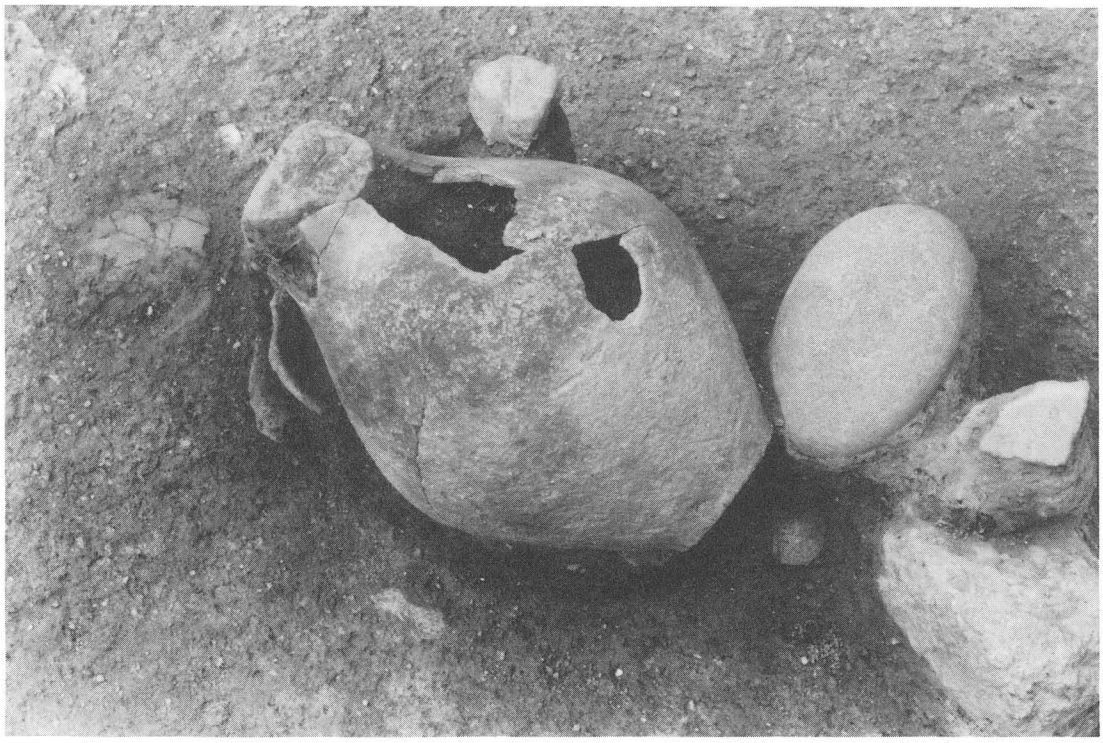
溝 I （東より）

溝 6（北より）

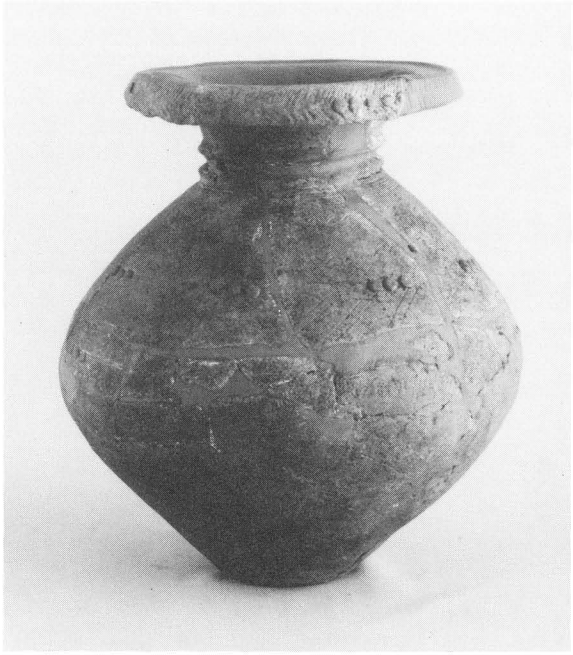
溝 I　土器出土状況



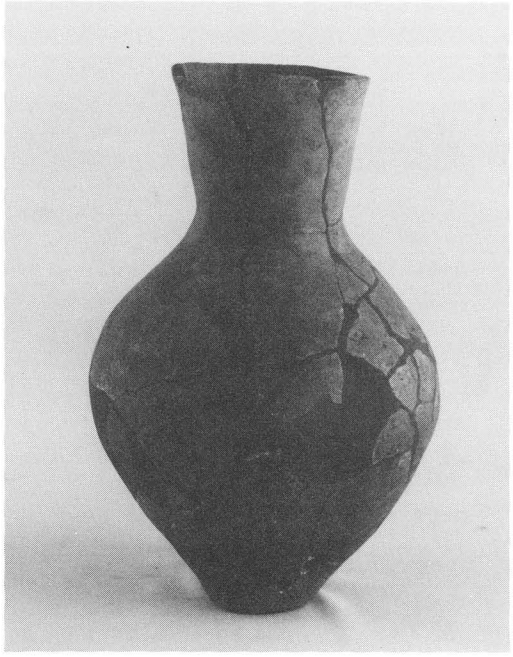
溝 4　土器出土状況



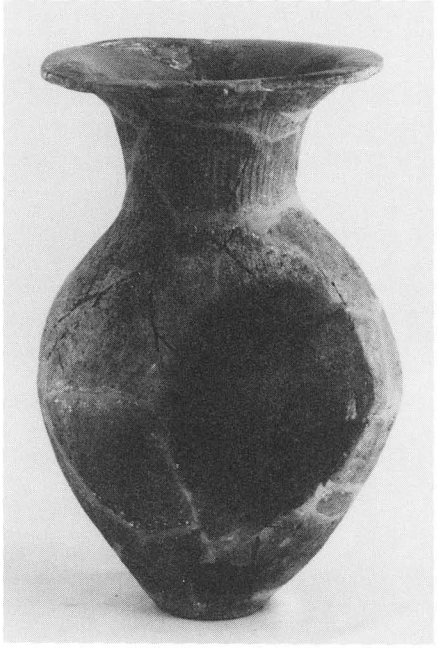
溝 5　遺物出土状況



1



4



3

6

溝 4　出土土器

森北町遺跡発掘調査報告書

1987. 3 .31

発行　神戸市教育委員会
神戸市中央区加納町6丁目5番1号

印刷　神戸共同印刷株式会社
神戸市中央区橘通4丁目1番3号

広報印刷物登録・昭和61年度第250号（A－6類）